

眼・水性鼻漏等のアレルギー症状を示す個体が見いだされた。興味深いのは、小豆島群由来の宮島、CHO および RIT 群において発症頻度が他群に比べ有意に高い点で、これらの集団には花粉症感受性素因（遺伝子）の蓄積率が高い可能性が示唆された。捕獲し得た150頭のうち皮内反応テストまたは RAST 法であらかじめスギ花粉に対して IgE 抗体を持つと考えられる個体は8頭であった。自然発症個体（3頭）の皮内反応誘発性および RAST 値については、花粉飛散期と非飛散期での変動はみられず、両時期において一定であった。従って、皮内反応と RAST 法は定量性のある、通年実施可能な検索法であることが示された。今後、スギ花粉症疾患モデルの可能性を追求する立場から、さらに調査を進めたい。

ヒトおよびサル由来レトロウイルスの各種サルリンパ球における感受性に関する研究

石川晃一（国立予研・エイズセンター）
辻本 元・大田芳宏（東大医科研・獣医）

AIDS 動物モデルの確立を目的として、まずヒト AIDS ウイルス（HIV-1 および HIV-2）とサル AIDS ウイルス（SIV_{AGM} および SIV_{MND}）を各種サルリンパ球に接種し、感受性を比較検討した。使用したサルは、ブタオ2頭、カニクイ2頭、ニホン2頭、ミドリ2頭、アカゲ2頭、ボンネット2頭、ベニガオ2頭、アッサム2頭、アジルテナガ2頭、マントヒヒ1頭、中米クモザル1頭、ワオキツネ1頭、ヨザル2頭、パタス2頭、フサオマキザル2頭、マーモセット2頭、リスザル2頭、ギャラコ1頭の計32頭である。これらサルよりリンパ球を分離し、ConA で刺激後各種ウイルスを接種し2週間培養を行ない、細胞変性（CPE）を指標とし感受性を検討した。その結果、HIV-1 に対して感受性を示したリンパ球は、アジルテナガザル（2/2）、HIV-2 に対しては、ボンネット（1/2）、アジルテナガザル（2/2）、SIV_{AGM} に対しては、ブタオザル（1/2）、カニクイザル（1/2）、ニホンザル（1/2）、ボンネット（2/2）、アッサムモンキー（1/2）であった。また SIV_{MND} に対して感受性のあるリンパ球は認められなかった。本研究で、HIV-1 および HIV-2 がアジルテナガザルリンパ球に高率に感染したことは、現在 AIDS の動物モデルとしてチンパン

ジーのみが有用であることから、新しいモデルとしての可能性が示唆される。さらに例数を増やすとともに、感受性を示したリンパ球でのウイルス抗原の検出と、培養上清中の逆転写酵素活性を現在検討中である。

泌乳期カニクイザルにおける排卵抑制の機序

横山 昭・前多敬一郎・東村博子・
大蔵 聡・宮田麻紀（名古屋大学・農学部）

ヒトを含む霊長類のいくつかの種において、分娩後の一定期間、月経周期の回期が遅れることが報告されてきた。これは、乳子による吸乳刺激が母親の性腺刺激ホルモンのうち特に黄体形成ホルモン（LH）の分泌を抑制する為であると考えられる。

本研究では、泌乳前期及び後期にある乳子を哺育中のカニクイザルを用い、母親の哺育行動及び乳子の吸乳行動と LH のパルス状分泌様式との関連をみるために、行動の観察と採血を行った。採血は、昨年度に検討した連続採血法をさらに改良したものにより行った。採血日の前日、ケタラル麻酔下で、シリコンカテーテルを頸静脈より右心房内に挿入留置し、採血用ベストを着用させ採血用ケージに房した。手術時間は、平均約2時間であり、この期間、乳子は母親から隔離した。採血開始直前まで、ベリスタルティックポンプを用い、前述のカテーテルを通じてヘパリン含有リンゲル液を低速で母体内に流入し、カテーテル内の血液凝固を防いだ。採血は、手術の翌日、同カテーテル及び同ポンプを用いて、無麻酔、無拘束の状態で行った。10分間隔で4時間採血を行い、1回の採血量は0.6mlとした。血液サンプルはすぐに遠心分離し、血漿を採取した。頻回採血による貧血を防ぐため、血球成分を、リンゲル液を用いて洗浄した後、体内に戻した。採血期間中、ビデオカメラを用いて母子の状態を観察した結果、母子の行動は採血により影響されないことを確かめることができた。このようにして、本年度はサルにおける無麻酔無拘束状態での連続採血法を確立すると共に、泌乳前期及び後期のカニクイザル各一頭について血液サンプルの採取を行うことができた。現在、サル LH 測定が可能な抗血清を用いたラジオイムノアッセイ系の確立を検討中である。この方法により、平成元年度にサンプル中の LH